

第15回 ちゅうでん教育振興助成（平成27年度）

報告書資料 復興支援－22

学校名・団体名	大仙市立平和中学校
HPアドレス	http://www.edu.city.daisen.akita.jp/~km-heityu/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	たくましく生きぬく力を育む防災教育
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>攻めの防災，守りの防災により，生徒にたくましく生きぬく力，他を思いやる心，社会で役立つ力を育成する。</p> <ul style="list-style-type: none">・被災地の現状を知ることで，ふるさとを見つめ直す機会とする。・被災地の方々との交流を通して，今後の交流の在り方を考える機会とする。・避難所開設宿泊訓練を実施することで地域の力となる生徒を育成する。・ふるさとを思い，地域と連携して活動できる能力を養う。	

1 はじめに

震災からまもなく5年、その記憶はまさに風化の一途をたどっています。千年に一度と言われる震災を子どもたちにどう伝えさせるか、そのことによって子どもたちの心に何を残せるか、それが震災以降、続けてきた本校被災地交流の根底にあります。

被災地を訪問してにぎやかにふれ合ってくるだけでなく、訪問によって子どもたちが自分の生活や環境を振り返り、今、同じ時を生きる者として、まだまだ難儀を強いられている方々に何が必要か、何ができるのかということを考える機会としたかったのです。

大切な人や物を失ってしまった方々に、私たちが今できることは何かを実行に移していくことで、また私たちも大きな教えを得ることができたと考えています。

2 活動内容

- ・平成27年 5月22日 教職員被災地交流視察（岩手県大槌町吉里吉里地区）
- ・平成27年 7月 7日 生徒会執行部の被災地交流視察（岩手県大槌町吉里吉里地区）
- ・平成27年 8月 1日 鉄クズ等回収（大仙市神岡地域）
- ・平成27年 9月 3日 第2回夢花火プロジェクト 復興支援花火大会
- ・平成27年 9月 4日 第4回大槌・神岡交流グラウンドゴルフ大会
- ・平成27年 9月17～18日 第3回避難所開設宿泊訓練
- ・平成27年10月10～11日 学校祭 被災者招待交流集会 ※教育振興助成金を活用

3 活動内容の詳細と成果

この取り組みは、本校生徒と教職員にとって、千年に一度を言われる震災の記憶を風化させることなく、被災地の「現在」を「見て」「聞いて」「感じる」かけがえのない機会となった。

最初に5月の教職員による被災地交流視察、7月に生徒会執行部の被災地視察により、今年度の交流活動について、被災地の方々と話し合いの場をもった。これを受けて、9月に第2回夢花火プロジェクト復興支援花火大会と第4回大槌・神岡交流グラウンドゴルフ大会を開催した。この2つの継続した取り組みを柱として、被災地の仮設住宅に暮らす、幅広い年齢層の方と交流を深めることができた。この交流は広がりや深まりをみせ、たくさんの方とふれ合っただけの心の交流が図られたと感じる。

特に今年度は、神岡から被災地を訪問しての一方的な交流だけでなく、「支援から交流へ」を合い言葉に、初めて、被災地の方々に学校祭に招待して、吉里吉里地区と神岡地区の地域間交流の架け橋としての活動を進めることができた。

また、大槌町吉里吉里地区との交流の深まり、広がりだけでなく、学区内の地域の方々からの学校への厚意も広がりや深まりをみせている。花火大会の資金集めとして、学区内より生徒と保護者で鉄クズを回収し、108万円もの資金を集めることができた。そして、グラウンドゴルフ大会の賞品を地域の各事業所において提供していただいているが、第1回大会の4事業所から、26事業所へと協賛が増えている。地域の方々の厚意を被災地の方々に届けることができた。

地域に対する思いは、避難所開設宿泊訓練でも表すことができた。この訓練は、避難所に指定されている本校体育館で、避難してきた地域住民に居場所や食事を提供し、行政機関や自主防災組織にその運営を委ねるまでの数日間、教師と生徒がその責を担うことになる訓練である。被災地交流活動から、自分たちのふるさとのために何かできることはないかという思いから始まったものである。避難してきた地域住民と接することで、生徒の“自分たちのふるさとを自分たちの手で守る”ことのできる「たくましく生きぬく力」と「他を思いやる心」「社会で役立つ力」を高めることにつながった。

被災地交流活動を始めとした「攻めの防災」と避難所開設宿泊訓練を中心とした「守りの防災」のなかで、今年被災地とふるさと神岡をつなぐ交流活動が生まれた。この岩手県大槌町吉里吉里地区の

方を本校の学校祭に招待し、地域間交流を進めたことについて、教育振興助成金を活用させていただき、以下の7点について成果を上げることができた。

- (1) 吉里吉里地区41名の方々を平中祭に招待したことにより、大槌・神岡の双方向の交流が実現した。
- (2) 被災地支援を続けてきた本校生徒の熱い思いや神岡地域の方々の本事業に向ける熱意を感じていただくことができた。
- (3) 「被災体験に学ぶ」と題してパネルディスカッションを行い、震災当時の様子を話していただき、多くの地域の方々に感銘を与えることになった。「日頃のつながりがいざというときの助けになる」という言葉が強く心に響いた。
- (4) 吉里吉里地区の中高生によって演じられた伝統芸能の鹿子踊りは、沿岸部らしく豪放勇壮な踊りで、頭と“かんながら”を大きく振り乱しながら舞う姿は迫力があつた。「震災に負けないでたくましく生きている。支援に対する恩返しをしたい」という吉里吉里の方々の思いが伝わり、見る者の心を揺さぶった。涙を浮かべている方も多く見られた。
- (5) 三陸の海産物が入った磯ラーメンの屋台は行列ができるほどの賑わいを見せ、サケ最中等の大槌町のお菓子も完売し、大好評であった。
- (6) 吉里吉里地区には、震災後、「愛する故郷の為に逆境に立ち向かおう」との志のもと若手商業者が中心となつてつくられた“はまぎく若だんな会”がある。神岡地区と吉里吉里地区双方の地域自治会、保護者と“若だんな”達レベルで交流が進み、さらに活発化する様相を見せている。
- (7) 大槌・神岡両地域の方々の協力を得て、本事業を成功裏に行うことにより、生徒は、大きな成就感、達成感を味わうことができた。今後、本校の生徒の課題である自己有用感を高められるよう指導していきたい。

4 結びにあたって

今回の取り組みは、これまで4年間被災地交流活動を続けてきた本校生徒会活動の集大成となるものである。この取り組みを通して、“平和中学校”を核として、大槌町吉里吉里地区の多くの方々、神岡地域の事業所を始めとした多くの方々の思いをつなぐことができた。

また、生徒は、被災された方々との交流から、被災地のかさ上げ工事や新しい住居の建設を強く望んでいることを感じるとともに、震災や未だ仮設住宅に住んでいる現状を忘れないでほしいという願いに共感する機会となった。グラウンドゴルフを通しての交流は、過去最高の69名の参加をいただいた。花火大会も多くの方に参加をいただき、神岡地域の自治会や市議会議員も加わり、交流を広げ、深める機会となった。震災を風化させず、交流を続けることに「心の支援」がある。今年度はさらに、「支援から交流へ」を合い言葉に、被災された方々の心情に寄り添って神岡地域全体で、被災地の復興について考えることができた。

また、本校防災教育の攻めの防災と守りの防災により、本校生徒は命の大切さや今生きていることの素晴らしさ、当たり前前の方が当たり前前のできることのありがたさを実感する機会となり、改めて「ふるさと神岡」を見つめ直すことにつながった。

保護者と“若だんな”の交流が深まって大きな進展がみられた。双方の地域自治会の交流も深まった。この大槌と神岡の架け橋となった本校生徒会の取り組みは、学校だけでなく、神岡地域の文化祭に吉里吉里地区の方々を招いて、大仙市神岡地域と大槌町吉里吉里地区が地域間交流へつながりつつある。今後早い段階に地域を巻き込んだ協議会の立ち上げに参加したいと考えている。

これまでの取り組みにより、生徒の自尊感情や自己有用感が高まり、生徒のたくましく生きぬく力、他を思いやる心、社会で役立つ力が醸成されつつある。さらに、ふるさとへの愛着心とふるさとに生きる意欲の喚起を目指していきたい。